

教育ボランティアにおける学生の学び

——和歌山大学教育学部における学生アンケートの分析から——

What are students learning from the experience of educational volunteers ?

From the analysis of student questionnaires at the Faculty of Education, Wakayama University

岩野清美

IWANO Kiyomi

(和歌山大学教育学部)

2020年10月19日受理

Abstract

The purpose of this study is to contribute to the better support of educational volunteer activities. The research questions are : (1)What are students learning by continuing to volunteer for education? (2)What are the problems students have when engaging in educational volunteers? Analysis of the questionnaire revealed that the longer the volunteer experience, the greater the awareness of the importance of focusing on and engaging with the children's inner self. It was also suggested that the problems faced by students differ depending on the grade and experience, and that different supports are required for each.

1 研究の背景と問題の所在

和歌山大学教育学部では、2019年度より教育ボランティアが単位化(各学年1単位、累積4単位)されている。このことの前提には、教育ボランティアによって得られる学びについて、(1)教育実習とは異なる特有の学びがあること、(2)活動を継続することによって得られる学びがあることの2点がある。

実際、教育学部1～3年生を対象に2019年9月～10月にかけて教育学部教員養成カリキュラム委員会が実施したアンケートによると、教育ボランティアと教育実習(1年生は「教育実地研究Ⅰ」、2年生は「教育実習入門Ⅱ」、3年生は主免実習)で学んだことの違いには差があり、教育ボランティアには特有の学びがあると考えられる(表1-3)。また、表4は、2018年度に和歌山市の教育ボランティア(学習支援員)に参加した学生の感想から、1・2年生、3・4年生の感想に特徴的な言葉をそれぞれテキストマイニングで抽出した結果であるが、1・2年生が、ボランティア先で接する子どもたちのかわいらしさに驚きながらも、観察者の立場にとどまる一方、3・4年生になれば、積極的に子どもとの関わりを築くことができていることなどが推察される。

しかしながら、教育ボランティアを継続することによって得られる学びについてはデータがない状況である。また、教育ボランティアを始めたものの、活動が継続しない学生もおり、それらの学生に対して必要な支援についても明らかになっていない。そこで、本稿では、(1)教育ボランティアを継続することによって得

られる学びを明らかにするとともに、(2)教育ボランティアに従事するにあたっての学生の困りごとを探り、よりよい教育ボランティア活動のサポートに資することを目的とする。

2 研究の方法

(1)アンケートの対象者と調査方法

和歌山大学教育学部の学生で、2019年度に教育ボランティアに登録した学生(計200名)を対象に、2019年12月～2020年1月の期間で「教育ボランティア」(4年生は「社会体験実習」)単位認定申請時に、単位申請書類とあわせてアンケートに回答するよう依頼した。アンケートの実施、分析は教員養成カリキュラム委員会が主体となって行った。回答者数は76名、教育ボランティア登録者(200名)に占める割合は、38.0%である。回答者の内訳を表5に示す。

(2)質問項目

教育ボランティアの活動を通じた学びについて尋ねる質問を5つ、教育ボランティアを通して困ったことやその解決方法について尋ねる質問を2つ行い、すべて記述式で回答を求めた。質問項目を表6に示す。

(3)分析方法

アンケートの回答(記述内容)をコーディングし、それぞれのコードに分類される回答数を集計した。1つの記述(文)に複数のコーディングがなされる場合もあった。コーディングの例を表7に示す。

3 結果

それぞれの質問項目に対し析出されたコードを表8に、また、それぞれのコードの出現頻度を表9-18に示す。なお、紙幅の都合上、コードの出現頻度については、学年、教育ボランティアの継続/新規によって顕

著な違いが見られたもののみ掲載している。

また、教育ボランティアに従事するにあたっての困りごとについて、活動経験の長さ、学年との関係を表19に示す。

表1 大学1年生による「教育ボランティアで学んだこと」と「教育実習で学んだこと」

| | 教育ボランティア (N=21) | 教育実習 (N=171) |
|--|--------------------|-----------------|
| A: 児童・生徒理解、子どもとの関わり | 90.5% | 60.8% |
| B: 授業における先生のテクニック(声のかけ方、発問の仕方、板書、導入の工夫、など) | 76.2% | 69.6% |
| E: 教職理解(教師という仕事の意義、楽しさ・大変さ、先生の子どもに対する思いや願い、など) | 52.4% | 38.6% |
| C: 基本的な授業構成(導入-展開-まとめの構成、学習活動の工夫、など) | 23.8% | 52.6% |
| G: 教師として学び続け、よりよい授業をめざしていくことの重要性とそのための方法 | 23.8% | 24.6% |
| D: 教材研究(子どもにわかりやすい教材・教具の工夫、など) | 9.5% | 25.7% |

注: 以下の8項目から、3つまで選択して回答。回答は、教育ボランティアにおける選択率が高かった項目の順に並べている。(以下同様)

A: 児童・生徒理解、子どもとの関わり

B: 授業における先生のテクニック(声のかけ方、発問の仕方、板書、導入の工夫、など)

C: 基本的な授業構成(導入-展開-まとめの構成、学習活動の工夫、など)

D: 教材研究(子どもにわかりやすい教材・教具の工夫、など)

E: 教職理解(教師という仕事の意義、楽しさ・大変さ、先生の子どもに対する思いや願い、など)

F: 「地域に開かれた学校」の意義、実際

G: 教師として学び続け、よりよい授業をめざしていくことの重要性とそのための方法

H: その他

表2 大学2年生による「教育ボランティアで学んだこと」と「教育実習で学んだこと」

| | 教育ボランティア (N=20) | 教育実習 (N=151) |
|--|--------------------|-----------------|
| A: 児童・生徒理解、子どもとの関わり | 90.0% | 84.1% |
| B: 授業における先生のテクニック(声のかけ方、発問の仕方、板書、導入の工夫、など) | 70.0% | 72.9% |
| C: 基本的な授業構成(導入-展開-まとめの構成、学習活動の工夫、など) | 50.0% | 37.8% |
| E: 教職理解(教師という仕事の意義、楽しさ・大変さ、先生の子どもに対する思いや願い、など) | 50.0% | 43.5% |
| G: 教師として学び続け、よりよい授業をめざしていくことの重要性とそのための方法 | 25.0% | 21.2% |
| D: 教材研究(子どもにわかりやすい教材・教具の工夫、など) | 10.0% | 21.9% |

表3 大学3年生による「教育ボランティアで学んだこと」と「教育実習で学んだこと」

| | 教育ボランティア (N=47) | 教育実習 (N=143) |
|--|--------------------|-----------------|
| A: 児童・生徒理解、子どもとの関わり | 89.4% | 77.6% |
| B: 授業における先生のテクニック(声のかけ方、発問の仕方、板書、導入の工夫、など) | 53.2% | 80.4% |
| E: 教職理解(教師という仕事の意義、楽しさ・大変さ、先生の子どもに対する思いや願い、など) | 51.1% | 42.7% |
| C: 基本的な授業構成(導入-展開-まとめの構成、学習活動の工夫、など) | 23.4% | 37.8% |
| F: 「地域に開かれた学校」の意義・実際 | 21.3% | 2.1% |
| D: 教材研究(子どもにわかりやすい教材・教具の工夫、など) | 10.6% | 42.0% |

表4 大学1・2年生と3・4年生によるボランティア活動の感想に特徴的な言葉

| | 1・2年生 | 3・4年生 |
|-----|---------------------|----------------|
| 形容詞 | 優しい、幼い、人懐っこい、かわいらしい | |
| 名詞 | | 声かけ |
| 動詞 | くれる、もらう、感じる、気付く、わかる | 動く、取り組む、叱る、ほめる |

※和歌山大学クロスカル教育機構教育地域支援部門地域教育支援室、和歌山大学教育学部『和歌山市教育委員会委託事業 平成30年度 学習補充教室推進事業報告』2019年2月に掲載された学生の感想文をもとに、ユーザーローカル社のテキストマイニングツールを用いて分析を行った。

表5 アンケート回答者の内訳 (単位:人)

| | 継 続 | 新 規 | 合 計 |
|-----|-----|-----|-----|
| 4年生 | 11 | 3 | 14 |
| 3年生 | 12 | 21 | 33 |
| 2年生 | 6 | 11 | 17 |
| 1年生 | — | 12 | 12 |
| 合 計 | 29 | 47 | 76 |

※「継続」は、昨年度から続けて同じ学校でボランティア活動を継続している者、「新規」は2019年度より新たに教育ボランティア活動を始めた者を指す。

表6 アンケートの質問項目

| | |
|-------------------------------|---|
| 教育ボランティアの活動を通じた学びについて | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもとの交流から学んだこと。 ・先生の様子を見て/お話を聞いて学んだこと。 ・一緒にボランティアとして活動している友だち/先輩の様子を見て学んだこと。 ・大学での授業と、ボランティア先での活動の往還を通して学んだこと。 ・ボランティアでの経験を自分の学びにつなげるために心がけたこと、工夫したこと。 |
| 教育ボランティアを通して困ったことや、その解決方法について | <ul style="list-style-type: none"> ・教育ボランティアをしていて困ったこと。 ・困ったときの相談相手、解決の方法。 |

表7 コーディングの例

| 質問項目 | 回 答 | コーディング |
|-----------------------|--|----------|
| ・子どもとの交流から学んだこと | 児童は私のどのような言動も、「先生が言っている・している」と認識するので、責任を持って交流しなければならないということ。 | 教師としての責務 |
| ・先生の様子を見て/お話を聞いて学んだこと | 現場を見てみると、すごく忙しそうに思えることもありますが、先生同士でサポートし合いながら、子どもたちが安心してできる環境を作っていたと思います。 | 組織としての学校 |

表8 析出されたコード

| | | |
|-------------------------------|---------------------------------------|---|
| 教育ボランティアの活動を通じた学びについて | 子どもとの交流から学んだこと | 子どもとの関わりで大切なことA/B(注1)/子どもとの関係で、どうすればよいか/子ども理解A/B(注2)/教師としての責務/現場に出ることの意義 |
| | 先生の様子を見て/お話を聞いて学んだこと | 組織としての学校/教師として学び続けることの重要性/教職理解/子ども理解の上に立つ臨機応変な対応/(子どもとの関わりの中で)「待つ」ことの必要性/教育の目的は子どもの成長にあり、教育活動は子どもが中心であること/子どもを受容すること/メリハリをつけること |
| | 大学での授業と、ボランティア先での活動の往還を通して学んだこと | 大学での学びを現場で生かす(ことができる)/現場でその学びがある(大学での学びを現場で生かすことは難しい)/現場での学びを大学での学びにつなげる必要性・大学での学びのモチベーション/現場での場数を踏む必要性/理論と実践の往還と省察による学びの必要性 |
| | ボランティアでの経験を自分の学びにつなげるために心がけたこと、工夫したこと | 大学教員に尋ねる/(ボランティア先の)先生に尋ねる・コミュニケーションを取る/子どもと積極的に関わる。子どもとの対応を工夫する/観察する・記録を執る/目標をたてる/学びを次の実践に活かす |
| 教育ボランティアを通して困ったことや、その解決方法について | 教育ボランティアをしていて困ったこと | 活動時間の確保/ボランティア先までの交通手段など/ボランティア先の学校の時間割変更・学校行事等による休みなど/何をしたらよいのかわからない/疑問を相談する時間・場がない/児童・生徒との距離感/子どもとの関わり(適切な指導の仕方) |

※注1 子どもとの関わりで大切なことA/Bは、「子どもの思いや願い・子どもの世界に寄り添う」という趣旨で書かれているものをA、「こちらが、どうする」という内容で書かれているものをBとした。以下に、A/Bの例をそれぞれ示す。

- ・子どもとの関わりで大切なことAの例：できないこと、補助が必要なことを、適切に支援・援助してあげることで子ども自身の成長や達成感につながる。また、できることでもその様子をしっかりと見届けながらほめることで、より満足感や先生との信頼関係が生まれる。ただ、そのほめるタイミングを見定めることがとても大切だとわかった。
- ・子どもとの関わりで大切なことBの例：休み時間など、こちらから声かけをし、関係を築くことは大切であると感じた。

※注2 子ども理解A/Bは、「子どもの思いや願いに着目」した記述をA、「興味・関心、反応、つまずきに着目」した記述をBとした。

- ・子ども理解Aの例：自分がよく行かせてもらっていた学級には、指が生まれつき不自由な子どもがいました。そのためその子は音楽の授業で「リコーダーは嫌」と言って寝ていたのですが、学級の子が音楽室からいなくなると、その子はリコーダーの練習をしていました。その子には「吹きたい」という願いがあったのだと思います。(後略)
- ・子ども理解Bの例：子どもの興味はどういったものに向きやすいのか子どもの流行について知ることができた。

表9 コード「子どもとの関わりで大切なことA」の出現頻度

| | 継続 | 新規 | 合計 |
|-----|-------|-------|-------|
| 4年生 | 45.5% | 0.0% | 35.7% |
| 3年生 | 33.3% | 23.8% | 27.3% |
| 2年生 | 33.3% | 18.2% | 23.5% |
| 1年生 | — | 8.3% | 8.3% |
| 合計 | 37.9% | 17.0% | 25.0% |

注：出現頻度は、それぞれのセルに分類される学生のうち、当該コード(表9では、「子どもとの関わりで大切なことA」)に分類される記述を行っていた者の割合を示す。以下同様。

表10 コード「子ども理解B」の出現頻度

| | 継続 | 新規 | 合計 |
|-----|-------|-------|-------|
| 4年生 | 18.2% | 0.0% | 14.3% |
| 3年生 | 25.0% | 23.8% | 24.2% |
| 2年生 | 16.7% | 54.5% | 41.2% |
| 1年生 | — | 58.3% | 58.3% |
| 合計 | 20.7% | 38.3% | 31.6% |

表11 コード「子ども理解の上に立つ臨機応変な対応」の出現頻度

| | 継続 | 新規 | 合計 |
|-----|-------|-------|-------|
| 4年生 | 36.4% | 33.3% | 35.7% |
| 3年生 | 33.3% | 19.0% | 24.2% |
| 2年生 | 33.3% | 18.2% | 23.5% |
| 1年生 | — | 0.0% | 0.0% |
| 合計 | 34.5% | 14.9% | 22.4% |

表12 コード「メリハリをつけること」の出現頻度

| | 継続 | 新規 | 合計 |
|-----|-------|-------|-------|
| 4年生 | 9.1% | 0.0% | 7.1% |
| 3年生 | 16.7% | 9.5% | 12.1% |
| 2年生 | 16.7% | 45.5% | 35.3% |
| 1年生 | — | 33.3% | 33.3% |
| 合計 | 13.8% | 23.4% | 19.7% |

表13 コード「(子どもとの関わりの中で)「待つ」ことの必要性」の出現頻度

| | 継続 | 新規 | 合計 |
|-----|-------|------|-------|
| 4年生 | 18.2% | 0.0% | 14.3% |
| 3年生 | 16.7% | 9.5% | 12.1% |
| 2年生 | 16.7% | 9.1% | 11.8% |
| 1年生 | — | 0.0% | 0.0% |
| 合計 | 17.2% | 6.4% | 10.5% |

表14 コード「大学での学びを現場で生かす(ことができる)」の出現頻度

| | 継続 | 新規 | 合計 |
|-----|-------|-------|-------|
| 4年生 | 18.2% | 0.0% | 14.3% |
| 3年生 | 16.7% | 14.3% | 15.2% |
| 2年生 | 50.0% | 9.1% | 23.5% |
| 1年生 | — | 33.3% | 33.3% |
| 合計 | 24.1% | 17.0% | 19.7% |

表15 コード「現場でこそその学びがある(大学での学びを現場で生かすことは難しい)」の出現頻度

| | 継続 | 新規 | 合計 |
|-----|-------|-------|-------|
| 4年生 | 72.7% | 0.0% | 57.1% |
| 3年生 | 25.0% | 47.6% | 39.4% |
| 2年生 | 0.0% | 36.4% | 23.5% |
| 1年生 | — | 8.3% | 8.3% |
| 合計 | 37.9% | 31.9% | 34.2% |

表16 コード「理論と実践の往還と省察による学びの必要性」の出現頻度

| | 継続 | 新規 | 合計 |
|-----|------|-------|-------|
| 4年生 | 9.1% | 33.3% | 14.3% |
| 3年生 | 8.3% | 4.8% | 6.1% |
| 2年生 | 0.0% | 0.0% | 0.0% |
| 1年生 | — | 0.0% | 0.0% |
| 合計 | 6.9% | 4.3% | 5.3% |

表17 コード「(ボランティア先の)先生に尋ねる・コミュニケーションを取る」の出現頻度

| | 継続 | 新規 | 合計 |
|-----|-------|-------|-------|
| 4年生 | 27.3% | 0.0% | 21.4% |
| 3年生 | 16.7% | 14.3% | 15.2% |
| 2年生 | 16.7% | 9.1% | 11.8% |
| 1年生 | — | 8.3% | 8.3% |
| 合計 | 20.7% | 10.6% | 14.5% |

表18 コード「子どもと積極的に関わる。子どもとの対応を工夫する」の出現頻度

| | 継続 | 新規 | 合計 |
|-----|-------|-------|-------|
| 4年生 | 54.5% | 33.3% | 50.0% |
| 3年生 | 58.3% | 42.9% | 48.5% |
| 2年生 | 50.0% | 36.4% | 41.2% |
| 1年生 | — | 8.3% | 8.3% |
| 合計 | 55.2% | 31.9% | 40.8% |

表19 教育ボランティアに従事するにあたっての困りごと

| | 上級生に多い | 学年を問わない | 下級生に多い |
|-----------|-------------------------|------------------|---|
| 継続者に多い | ・子どもとの関わり (適切な指導の仕方) | ・疑問を相談する時間・場がない。 | |
| 経験年数を問わない | | ・児童・生徒との距離感 | |
| 新規活動者に多い | | ・何をしたらよいかわからない。 | ・活動時間の確保／ボランティア先までの交通手段など ・ボランティア先の学校の時間割変更・学校行事等による休みなど |

4 考察

(1)教育ボランティアの活動を通じた学びについて

教育ボランティアを継続したり、学年が上がるにつれて出現頻度が上昇するコードとして、以下の5つが挙げられる。

- ①子どもとの関わりで大切なことA
- ②子ども理解の上に立つ臨機応変な対応
- ③(子どもとの関わりの中で)「待つ」ことの必要性
- ④現場でこそその学びがある(大学での学びを現場で活かすことは難しい)
- ⑤理論と実践の往還と省察による学びの必要性

これらの具体的記述例を、以下に示す。(記述はすべて、原文まま)

- ①子どもとの関わりで大切なことA
 - ・勉強や遊びなど、学校生活において子ども達には「子どもの世界」があり、教員はその世界理解し、寄り添うことが重要だと学んだ。(4年生・継続)
 - ・(前略)何か嬉しいことがあった時や、頑張っている姿を見て欲しい時などに、「先生あのね…」 「先生見て！」と声をかけてくれる。その子どもの伝えたい思いを受け止め、応答的に関わるのが大切だと学んだ。(3年生・新規)
 - ・子どもの行動を見て、決めつけて叱ったりしてはいけないと思った。こちらが思っていたより深いことを考えていることがたびたびあった。(3年生・新規)
- ②子ども理解の上に立つ臨機応変な対応
 - ・授業中に1人ひとりをしっかりと見て、個別にサポートすることの大切さを学んだ。(4年生・継続)
 - ・特別支援学級では、その子一人一人のその日の状態に応じて指導方法を変えたり、集中できるような声かけをしたりする方法やタイミングを学ぶことができた。(3年生・新規)
 - ・子どもの様子をすごくよく観察している。変化が行動にいち早く気づき、対応していた。(2年生・新規)
- ③(子どもとの関わりの中で)「待つ」ことの必要性

- ・見守ること(3年生・継続)
- ・授業に集中できていない児童がいたら基本的には声をかけるが、一部の児童に対しては、声をかけず、授業に戻って来るのを待つことをする。(3年生・新規)
- ・(前略)何でもかんでもやってあげるのではなく、出来る・するまで待つ・放っておくことも必要だということ。(3年生・新規)
- ④現場でこそその学びがある(大学での学びを現場で活かすことは難しい)
 - ・大学で学ぶ事のできない実際の現場でのリアルな声を先生方から聞く事ができた。(4年生・継続)
 - ・大学では聞くことで情報を得るが、ボランティアは実際に行って子どもの様子、クラスの雰囲気を見ることができると、肌で学校の感じを見ることで、先生の対応など学べた。(3年生・新規)
 - ・大学で学んでいるだけでは不十分であり、実際の現場を見ることで初めてわかることも多いということがわかった。(3年生・新規)
- ⑤理論と実践の往還と省察による学びの必要性
 - ・大学で学んだ子どもとの接し方や、支援の仕方を実践してみた。先生の講義の中で説明していたとおりの反応がくることや、そうでないこともあったため、しっかり自分で学んでいかなければいけないと感じた。(4年生・継続)

子どもの関心や反応、つまづきなどの表面に現れたものに注目していた学生たちが、上級生になれば、また、ボランティア経験が長くなると、子どもの内面に注目して関わることの重要性に気づいていく。また、自分の振る舞いについても、大学の講義で学んだ振る舞いを行動に移してみるだけでなく、子どもの反応を受けとめながら省察することができるようになってきている。

(2) ボランティアでの経験を自分の学びにつなげるために心がけたこと・工夫したこと

教育ボランティアを継続したり、学年が上がるにつれて出現頻度が上昇するコードとして、以下の2つが挙げられる。

- ①子どもと積極的に関わる。子どもとの対応を工夫する
- ②(ボランティア先の)先生に尋ねる・コミュニケーションを取る

これらの具体的記述例を、以下に示す。(記述はすべて、原文まま)

- ①子どもと積極的に関わる。子どもとの対応を工夫する
 - ・児童と関係を築き、信頼してもらうために、毎週通い、休憩時間も積極的に話しかけた。そうすることで、児童の本心を聞くことができた。(2年生・継続)
 - ・まずは子どもに明るく笑顔で話すことから始めて、子どもが出来たことは「すごい」などほめることで、子どもとの距離を縮めました。また、休憩時間は一緒に遊ぶなどして、普段の様子をみることで、こどもの考えによりそおうとしました。(2年生・継続)
- ②(ボランティア先の)先生に尋ねる・コミュニケーションを取る
 - ・困ったこと、分からなかったこと、気になったこと等は全て先生方に聞くよう心がけた。(4年生・継続)
 - ・気づきをメモしたり、先生にある児童のことをときには相談したりして、いろんな先生の考えを聞き、それを実践していこうと心がけた。(2年生・継続)

「子どもから学ぶ」ことの重要性と子ども観察(見とり)については、大学の授業でも扱うところであるが、一朝一夕にできるものではない。実際、学年が上がるにつれ、また、ボランティア経験が長い学生の方が、

自分の学びのために「子どもと関わる」と回答する者が多くなっている。

一方、ボランティア先の先生に尋ねる、コミュニケーションを取る、という学生は学年が上がるにつれ、また、ボランティア経験が長くなる方が多くなるとは言え、全体としてその数は少ない。忙しい学校現場で学生を受け入れていただいているため、学生の学びの質保証のための手立てについては、今以上に大学で考えていく必要がある。

(3) 教育ボランティアに従事するにあたっての困りごと

表19より、ボランティアを始めたばかりの者、また、下級生が、ボランティア校への交通手段や何をしたらよいかわからないなど教育ボランティア活動自体に対する困りごとを抱えているのに対し、上級生になり、また、活動年数が長くなると、子どもとの接し方について困りごとを抱える者が多くなるなど、経験を重ねるうちにボランティア先の学校から信頼を得、任せられる活動が増えるがゆえの悩みが生じている。

大学として、それぞれの学年・活動年数に応じて生じる悩みを把握し、そのサポートを行う必要がある。

5 おわりに

これまでの考察から、教育ボランティアを継続することによって得られる学びとして、児童・生徒の内面に着目した学びがあること、また、そのような学びを可能にしている条件として、子どもと積極的に関わること、子どもの反応を見ながら反省的に関わっていることが指摘できる。

一方で、ボランティア活動に長く従事している学生の方が、活動での困りごとに「子どもとの接し方」を挙げるなど、学生の学年、経験によって、抱える困難に違いがあることも明らかになった。このような学年、経験による違いを踏まえて指導していくことが、学生の活動を通じた学びの充実につながっていくものと考えられる。